

信濃教育

十五の夜

初めての高校の文化祭は中学校との違いが大きく、さすがに高校だと思わせるものが多かった。最終日の夕刻、校庭でファイアーストームが行われた。火を見て歌い踊るといふシンブルなファイナレだが、十五の私の心は熱く燃えていた。とっぷりと日は暮れ、文化祭のファイナレが最高潮に達したころ、三年生の先輩がマイクを持って突然叫んだ。

「周りで見ている先生たち、俺たちと一緒に輪に入ってくれ。一緒に楽しんでほしい」
叫んだ先輩は誰だったのかわからない。またその時の私は、将来教員になろうとは考えていなかった。しかし先輩の言葉が妙にかっこよく思え、私の心に深く刻まれた。

紆余曲折がありながら、私は中学校の教員になった。教員になって何年か経った時、ふとあの先輩の言葉がよみがえってきた。なぜなのかわからない。たぶん生徒との距離感に悩んでいたのだろう。「そっだよなあ。生徒の輪の中に入っていくような教員がいいよな」と思い、生徒の外側で見ているのではなく、できるだけ生徒と一緒に楽しむことを心がけた。

生徒の輪に入ることは校長になっても続けた。ちよつと悪さをしてしまった生徒に、保護者と共に校長室で話をしていたとき、その子の父親が「お前たちの前で歌を歌ってくれる校長先生に迷惑をかけてはいけない」と説教をした。意味はよくわからないが、ありがたいことであつた。また、吹奏楽部のファイナルコンサートで、生徒の演奏にあわせ、教頭先生と二人でウルトラソウルを歌ったときは、コンサート後知らないおじさんに「校長先生、よかったよ」と握手をされた。

生徒と同じ輪に入ること、愉快な思い出がたくさんできた。あの十五の夜、マイクを持って叫んだ先輩はほめてくれるだろうか。